

論 文

一八五七年恐慌 (完)

三 宅 義 夫

二

右のように一八五七年十二月三十一日付の手紙のなかでエンゲルスは、「目下のところ当地の人々は、最初の局面、すなわち貨幣恐慌とその直接の諸結果とがすぎ去ったことから、恐慌はすぎ去ったと信じてみずからをだましてゐる」、いま一方に倒産がつづいていると同時に、他方で市況が動きはじめてきてやや小康をえてはいるが、「この状態は長くはつづかないだろう。さし当り僕はこんなふうと思う、——当地では弱い上がり下がりがあり、全体としては下向してゆく傾向を辿る」云々、と記していたが、その具体的状態についてはそこでつぎのように告げている。

すなわち前掲のように、個々のブルジョアは自分の営業は「完全に健全」だと思つてゐる。Western Bank of Scotland の破綻に關係した紊乱の見本のような商社に比較すれば自分は「きわめて品行方正」だと思えてくるのは

当然だが、としたのち、こう記している、——「しかしそうだからといって、Proost氏がそのコーヒー三万五千袋のために彼の財産の三分の二ないし四分の三を失うことを免れているわけではない」、また Senator Merck氏が二千二百万マルク・バンコにのぼるその積荷その他の取引のために彼の全資本が食いつぎされてしまうことを免かれていたわけでもない。John Pondus——最近数年間に茸のようにばかでかくなつたスコットランド出の当地の成金——は五種類の絹七千梱をだめにしたが、それで三十万ポンドの損失を蒙ることになる。これらすべてが片づくのはやつと三、四月までかかるだろう。そして生産物市場(Produktenmarkt)の値をあふらうと大いに骨折つてみても、船が入ってくるごとにきまってだめになるだろう。現在は結氷があるようだしかつ東風(Ostwind)のようだから、船は一隻も入ってこれないでいる。これが八日ないし十四日間つづくなら、すべての生産物(Produkte)の値が上がることはたしかだ。だがついで最初の西風(Westwind)——これは大船隊を運んでくる——が吹いてくるとき、それだけはげしく値下がりが生じるわけだ。それが恐慌期における需要供給と申すものだ。リパールの綿花のストックはそれ自体でもふえはじめている、——今日の入電では四十万梱、これは平均のストックよりも多いくらいだ。もっとそうなれ、そうすれば綿花は春ごろにはもっと下がることはたしかだ。綿花は現在ふたたびペンス上がっているが、これは当地の de Jersey & Co.——この商会は全ロシア市場をほとんど一手に握っている——が前週、同商会がアメリカに出していた注文を全部取消すの間に合つたという知らせを受取つたので、リパールで約六千梱買入れたからだ。このことによつて市場は活気が出て、かねを持っていた紡績業者たちはあつちに出向いて行って、低い値で補填するために若干買った。それによつて当地でもいくつかの商社が気が気でなくなり、ないしむしろ大胆になつて、同様に糸や織物を、『最低値の時期』を逃さないために買入れた」。

その前一八五七年十二月十七日付の手紙では同じくエンゲルスは前掲のように「マンチェスターはますます深みにはまり込んでいる。市場にたいして不断の圧迫がまったくはなはだしくはたらいっている。だれも売ることができない」と記していたが、この十二月三十一日付の手紙では見られるように、一方において大きな損失を生じているものがある他方において、低く下がった値ごろから買い物が出てきていることが告げられている。そしてこの十二月三十一日付の手紙では前掲のように右につづけて、「この状態は長くはつづかないだろう」云々といっていたのであった。だが、明けて一八五八年一月六日付の手紙ではつきに見えるように、「恐慌はいまのところともかく落ち着いており、そしてあたらしい轉換にきている、すくなくともマンチェスターと木綿工業にかんしてはそうだ」として、紡績業者たちが原綿の手持ちがなくなってきたのでその手当の買いにリバプールに出かけたこと、マンチェスターでも取引の出会いが成立しつづつあることを告げている。

一八五八年一月六日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「鋭い恐慌の間 (Während der akuten Krise) 僕は一般的崩壊 (general crash) 以外のなにごととも考えることがまったくできなかった。読むことも書くこともできなかった。『百科辞典の軍事物の項はエンゲルスが引受けることになってしたが、それがエンゲルスからこのところずっと来ないのでアメリカに送れないでいるが、この仕事を続けてやる意志があるかどうかとマルクスが問合せたのにたいする弁明の返事』。……／＼恐慌はいまのところともかく落ち着いており (Stillstand)」、そしてあたらしい轉換 (neue Wendung) にきている、すくなくともマンチェスターと木綿工業にかんしてはそうだ。月曜日(一月五日)には大勢の紡績業者がリバプールに向いて一万二千梱買入れた。多くの者がまったく空っぽに (blank) なってしまったので、ふたたびいくらか仕入れるためにだ。このため綿花が上がった。と同時に、当地ではギリシア人が市場にやってきてかなりたくさん買ったの

で、当地でも右に照応した値上り「糸や織物などの製品であろう」が生じた。当地およびリバプールでは最低だったところをすでに $\frac{3}{4}$ ペンス(封度当り)こえるにいたった。こんどは買手がふたたび尻込みするだろう。だがしかし東風がつづくならば、綿花および綿糸は、二、三月ごろ満載した積荷が着くまで、まだもつと下がるだろう。「ここは Wenn aber der Ostwind anhält, geht Baumwolle und Garn noch mehr herunter, bis die vollen Ladungen kommen, gegen Februar und März. と書かれているが、この herunter は反対の herauf——つまり「下がる」でなくて「上がる」——ではなからうかと思われる。「東風がつづくならば」ということは前の十二月三十一日付の手紙にもあるように、綿花を積んだ船がリバプールにあまり入ってこないことを意味するわけであろうから——このころまだ綿花の輸送は帆船によっていた——、とすれば価格はむしろ上がることになるはずと思われるからである。そしてまた前の手紙でも東風がこしばらくつづくなら「すべての生産物の値が上がることはたしかだ」といつている。糸および綿花の値を、工場をショート・タイムで操業しながら、釣り上げようとする考え⁽¹⁾。これは需要をいよいよもつてへらす以外の結果しかもたらしはしない、——この需要の減少は目下のところは一とえに、生産を需要につれて増減させているというところのためから、価格のうえには影響を及ぼさない——。中等品はふたたび六ペンス $\frac{1}{4}$ から $\frac{3}{8}$ というところ、今日はおそなく六ペンス $\frac{1}{2}$ だろう。もつとも終り値の報告はまだ見えないが「綿花の価格のことである」。／＼製品(Produkte)においても、連中はかねを投下することが困難なので、「一時ふたたびすこし値上げをするらしい」「かねを投下することが困難なので (Infolge der Schwierigkeit, Geld anzulegen)」というのは、生産に投下して——たとえば原料、労賃に投下して——生産を拡大すれば、綿花価格を騰貴させることになるし、また製品にたいする需要もふえていないので困難である、だから収入ないし利潤量が大きくならないので、これを大きくしようとして値上げの方に訴えようとする、といった状況を指していることなのであろう。これは西風(Westwind)がはじまるまで

つづくだろう。／＼なお、市場にばく大な量の剰余資本 (Surpluskapital) があることはきわめておどろくべきことであって (Höchst wunderbar) 一八四七年以来すべてがいかに巨大な規模をとるようになったかのあたらしい証拠をなすものだ。恐慌の爾余の諸局面が片ついてしまいう前に、浮動資本 (floating capital) のこの過剰があたらしい株式 Schwindel を現出させるとしても、僕は少しもふしぎでないと思う。遊休している資本 (disponibles Kapital) のこの過剰はまたたしかに、フランスの Schwindel の維持に貢献してきたものであり、そしてクレディ・モビリエをして恐慌に耐えてきたのちの今日、世界におけるもっとも堅実な機関の一つだと主張することをえせしめているものなのだ。」

同年一月七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「同封した今日のガーディアンから、ショート・タイムが当地でまだ非常に広く行われていることがわかるだろう。来週はおそらくふたたびすこしへるだろう」。

同年一月七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「恐慌の目下の小休止 (Null) は、われわれの利益——というのは党の利益の意味だ——にとってすこぶる貢献的 (zurüglich) であるように思われる。一八四八年のときでさえ、イギリスでは最初の小休止ののちに、二、三の間隔をおいて、なおきわめて大きな打撃がやってきたのであり、しかも当時噴火口はすでに一八四七年の四月以来活動していたのであった、等々。……／＼クレディ・モビリエはその株式を最近二、三週間、配当を二五パーセントとすると公告することによって、いちじるしく高めた。こんどのこの配当は疑いもなく蝸配だ」。

(1) 工場のショート・タイムすなわち操短は、製品の価格にたいしては維持ないし釣り上げに働くとしても、原料にたいしては騰貴をはばむ作用をすることはいうまでもない。恐慌に先立つ一八五七年には年初から紡績、織物工場でショート・タイムが間

題となり、春ごろには広く行われていたが、これも原料綿花の不足による騰貴にたいして、その騰貴を抑えようとして採られたものであった。こゝは *Die Idee, Garn und Baumwolle in die Höhe zu treiben, with factories on short time* と書かれているが、これは *Garn und Baumwollprodukt* —— すなわち糸および木綿製品つまりここでは織物—— なのではなからうかと思われる。あるいは「糸および綿花」であるからこそ感嘆符！がつけられているのかもしれないが。

なお木綿工業のシート・タイムについてはまえに見たエンゲルスの手紙のなかでもいっているが—— たえば一八五七年十一月七日付、十二月十一日付——、一八五七年十一月の *monetary panic* 以前のそれについては既掲の *Hughes ; Fluctuations*, pp. 90—5, (3) *Production Cutbacks, 1857, and the Short-Time Movement* 参照。

(2) イギリスでは経済恐慌についていえば、一八四七年四月に一度バニックが来て、十月に大きな爆発となったが、その後は強度はとみに減じていった。そして、——「一八四八年の」三月から五月の間に、イギリスはすでに革命「一八四八年の二月革命」から直接の利益——大量の大陸の資本がイギリスに流入したという——を享受した。この時をもって、恐慌はイギリスでは終わったと看なされるべきであって、すべての事業部門で好転が生じ、あたらしい産業循環が繁榮への決定的な傾向を伴ってはじめた「*Neue Rheinische Zeitung*」の「一八五〇年第五、六合併号に掲載のマルクス、エンゲルス執筆の「評論、五月—十月 (Revue, Mai bis Oktober)」復刻版 Berlin, 1955, S. 309)。したがってマルクスが上のように「一八四八年のときでさえ、イギリスでは最初の小休止のうちに、二、三の間隔をおいて、なおきわめて大きな打撃がやってきた」といっているのは、どういふ意味なのかわからない。

あるいは「一八四七年」の書き誤りとすれば意味は通じるが、しかし一八四七年十月のイングランド銀行条例停止に該当する今回の条例停止はすでに前年の一八五七年十一月に生じているので、これも具合が悪いようである。そこであるいは一八四八年当時ふたたびさかんになってきたチャーチズム運動のことを想起していっているのであるうかとも考えられる、——「目下の小休止」といっているのは経済恐慌の過程についてのことであるから、前のときはどうだったといっているのも経済恐慌の過程に直接即したものでなくてはおかしいが——。イギリスで一八四七年恐慌がすぎ去ったのち、フランスでの二月革命、ならびにそれにつづいた一連の政治的変動の波を受けて、イギリスでも数年火の消えていたチャーチズム運動がふたたびさかん——といったもこれも「きわめて大きな打撃」というほどのもではなかったが——となった。なお、だが一八五七年恐慌のさいは大陸でも前のときのような恐慌と結びついたはげしい政治的動きは生じなかったが、イギリスでも、のちに見るようにジョーンズがマ

ルクス、エンゲルスの嫌う方向に向うというようになった。

このように、一八五七年末には、市況がやや動きはじめてきているがこの状態は「長くはつづかないだろう」とし、「当地では弱い上がり下がりがあり、全体としては下向してゆく傾向を辿る」という見透しをもっていたが、それから一週間とたたない一月六日付の右の手紙では「すくなくともマンチェスターと木綿工業にかんして」は「あたらしい転換」にきている感じであることを告げている。以前一八五七年十一月十五日付の手紙のなかでエンゲルスが、「綿花が封度当り六ペンスにならなければ、当地の木綿工業は一時的な立直りもまったく可能でない。そして現在七ないし七½ペンスだ。このことから君は、当地では事態が転換の可能性にもほとんどいたっていないことがわかるだろう。だがしかし春には一時的な転換が可能、というよりおそらくそうなりそうだ。『好況』への転換というわけではないが、商売がふたたびやってゆけるような転換だ」と述べていたことが想起される。しかし十一月のこのときには——イングランド銀行の銀行条例停止は十一月十二日——恐慌はこんなに「急速かつ一撃で」終るはずはないとして、「この『回復』が慢性的な恐慌に入り、それから二度目のそして決定的な主要打撃がやってくることを待望していたのであったが、——そしてまた一八五八年一月六日付の右のマルクスの手紙でもまだ恐慌は目下「小休止」の状態にあると見ていたのであるが——、一八五八年のはじめに見られたこの木綿工業の「転換」は、その後の現実においては、そのあとさらに悪化を辿る間の「一時的な転換」、「一時的な立直り」ではなかった。のちに見るように木綿工業はこの年の前半はまだ、しだいに改善の動きが見られたがなお動揺的であったが、その後はつきりと上向を辿るにいたり、急速に好況状態を現出するにいたったのであった。

市場における遊休貨幣資本の過剰。エンゲルスはここで *floating capital* の過剰といっているが、同じエンゲル

スはさきに見た一八五七年十二月七日付の手紙のなかで「大ていのわれわれ紡績業者および製造業者は *Floating capital* が非常に乏しいので」云々と記していた。しかしそこで *Floating capital* といっていたのは、いまここで *Floating capital* と呼んでいるもの——短期の貸付可能な貨幣資本——とはちがって、そう訳しておいたようにおそろく流動資本の意味で使っていたのである⁽³⁾。前記のようにイングランド銀行のバンク・レートは一八五七年十二月二十四日に一〇パーセントから八パーセントに引下げられたのち、一八五八年一月七日——すなわちエンゲルスが右の手紙を書いていた日——に六パーセントに引下げられ、さらに同月十四日には五パーセント、同二十八日には四パーセント、二月四日には三パーセント^{1/2}、そして二月十一日には三パーセントと、ほとんど定例理事会のある毎週木曜日ごとに引下げられていった、——「そのレートは市場レートと相並んでころげ落ちていった」、*went tumbling down* (Clapham; *Bank of England*, vol. II, p. 234)。この三パーセントというのはここ数年來の——一八五三年六月二日に三パーセント^{1/2}に引上げられて以来の——低さであって、こうしたバンク・レートの急速な低下から窺われるように、貨幣市場はパニックのあと急速に回復し、さらに緩慢に進んでいった。イングランド銀行条例を停止した一八五七年十一月十二日には既述のように同行発券部の保有ブリオンは六、五二四千ポンド、銀行部の準備額は五八^{1/2}千ポンドであったが、一八五八年二月十日(水曜日、週報は水曜日現在)には発券部のブリオンは一五、七四六千ポンド、銀行部の準備額は一一、四四六千ポンドに達していた(Clapham; *ibid.*, p. 234)。

エンゲルスが右の手紙を書いているのは一月七日であり、この手紙からもそのころ遊休貨幣資本の過剰が目立つようになつてきたことが窺われるが、この月下旬に『ニューヨーク・トリビュン』に寄せたマルクスの論説「来るべきインド公債 (*The Approaching Indian Loan*)」(『トッケマン』一八五八年二月九日号所載、執筆日付一月二十二日)のな

かでもつぎのように書かれている。——「大量の資本が通常の産業投資から引上げられ、ついで公債市場に移されたことよって呼びおこされたロンドン金融市場の活況は、八百万ないし一千万ポンドにのぼる来るべきインド公債にたいする予想から最近二週間いくら弱まった。この公債は、イギリス本国で発行される予定のもので、二月に議会が開会された直後にその承認をうるはずである。……この種の出来事がなぜならかの危惧を呼びおこすのかという疑問がおこるかもしれない。……こんなに有利な投資先をむなしく探し求めているイギリスの資本にとっては、現状において資本を吸収するものであれば、どんなものでも真の恩恵として、資本の急速な値下がりにたいする救済手段とみなさるべきではないのか?……たしかにロンドン金融市場における東インド会社のあいつぐ公債発行は、貨幣価値を高め、また資本の価値下落の進行、すなわち金利のいっそうの低下を予防するものであるかもしれない。ところがまさにこのような金利の引下げこそイギリス商工業の活況の回復のために必要なのである。割引利率の低下運動を人為的に阻止することは、すべての生産費と融資条件とを引上げることと同意義であるが、イギリスの商工業は現在の弱さからしてとうていこれに耐えることができないと感じている。ここからインド公債の発表にたいして一般に絶望の叫びがあげられているのである」(大月選集訳、第八巻、二九四―八ページ、傍点―三宅)。なお、マルクスはイギリス商工業の活況の回復のためには低い利子率が必要であること、そして多額のインド公債の発行はこの利子率低下をさまたげることになると述べているが、前記のように利子率はこのあとより下がっていった。そしてまた「イギリス商工業」はこの低い利子率にもかかわらず、一八五八年には——木綿工業の回復はあとに見るようにインドからの需要増大のため夏ごろから急速に進んだが——回復はあまり捗々しくゆかなかつた。

この遊休貨幣資本の過剰、低い利子率は貨幣市場が恐慌から急速に回復したことを示しているものであるととも

に、他面それは、商工業の沈滞を反映したものであった。そして、「カタストロフィは世界的な拡がりをもった。そして、ブリテンは被害を受けることがもつともすくなかった方であった」(Clapham ; *Economic History of Modern Britain*, vol. II, p. 370) が、この利子率低下はそうしたイギリスにおいてだけでなく当時他の国々にも見られた現象であった。——「一八五八年」一月のはじめ、パリおよびハンブルグにおいて五パーセントで割引が行われていた」(Clapham ; *ibid.* p. 372)、「すでに一八五八年の初頭、高度資本主義の諸国民経済での割引率はいずれも一八五〇—一八五二年の低い水準にふたたび達していた」(H. Rosenberg ; *Weltwirtschaftskrisis von 1857—1859*, S. 138)。遊資過剰が諸国で一般に見られたことについてはマルクスもまた、のちに見るように一八五八年二月十九日執筆の『トリビュン』への論説のなかでも、また同年十月八日付エンゲルス宛の手紙のなかでも触れている。

(3) マルクスもこのエンゲルスの手紙のすこしのちの一八五八年三月五日付エンゲルスへの手紙のなかで、「……ごく大体でも説明してほしいもう一つの問題は、たとえば君の工場もしくは工場事務所で、floating capital は大体どのように原料、賃銀に分けられているか、また君たちは平均してそのどれだけの部分を銀行業者のところに置いておくか、ということだ」と記している。この floating capital も流動資本の意味であることはいうまでもないであろう。

— III —

一八五八年一月二十三日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「マンチェスターの商売はどんな具合だろうか？

万事が、予期していたよりも良くなってゆくように見えるが(Es scheint alles besser zu gehn als erwartet)。」

これにたいする返事として、エンゲルスは一月二十五日付マルクスへの手紙のなかでつぎのように書いている。

「当地の商売はきわめて不安定だ(wackelig)。二週間ごとに、綿花の値を釣り上げようとする試みがなされている。

若干の紡績業者が買入れねばならない時期がそれに利用されている。これは三日か四日効を奏するが、そのあとまた価格が下がる。大体において現在、最低だった点を $5\frac{1}{2}$ ペンスこえている。当地でも同様であって、二週間の停滞によって価格が強く圧し下げられると、インドおよび近東の買手が市場にやってきて、それによってすべての値が上がる。それからだれもそれ以上買おうとしなくなり、価格がしだいにまた下がる。まだ一こうに調子がととのっていない (Es ist gar nichts Rechtes)。紡績業者たちは全時間操業をはじめているが (gehn auf volle Zeit) これはじっさいの需要があるためでなく、他の人々がそうしているし、またショート・タイムにすっかり飽きて (satt) しまったからだ。おしなべて紡績業者の地位は、原料、綿花と糸との価格差が小さくなったために、悪化している。ドイツ人はまだほんのすこししか買っていない。当地の状況はまだぜんぜん輝きがなく、価格をもっと釣り上げようとする試みのために毎日取引がはばまれており、そしてたまたまうまくゆくと、市場には改善の気配があるなどといっている。改善などとは呆れたことだ」(傍点—三宅)。

つぎは同年二月十八日付同じくエンゲルスからマルクスへの手紙。「今週は毎日君に手紙を書きたいと思いがながら、価格〔棉花の価格〕がたえず上がっていたため、書くことができなかった。前に君に、オルレアンの中等品六ペンスというのがフル・タイムと両立しうる価格の最高限だと言ったことを思い出してくれ。⁽⁴⁾現在すべての紡績業者の八分の七がオルレアン中等品当り五ペンス $\frac{3}{4}$ でフル・タイムをはじめた。〔この 5 $\frac{1}{2}$ d. は 6 $\frac{3}{4}$ d. の誤りであろう〕。そしてこの馬鹿げたことの結果として、彼らはまったくのせつかちからオルレアン中等品を六週間で〔つまり一月上旬以来とすることになる〕七ペンス $\frac{3}{4}$ まで、釣り上げてしまったのだ！もちろん糸および織物はこれと同じ度合では追隨しなかった。それで原料の価格とその完製品の価格との間の工場主たちのマージンは、費用価格以下に低下した〔der mat-

gin des Fabrikanten……ist unter Kostpreis reduziert. マーシンの費用価格以下に下がったというのはおかしいが、要するに原料費、フランス賃銀その他の諸経費を償わないという意味である。かくてこの馬鹿者たちは——彼らはもともとそうしかするべきではなかったのだが——ふたたびショート・タイムをやろうとしている！」（傍点―三七）。

同年三月一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「今日のガーディアン「この手紙のはじめの方で「今夕ガーディアンを数部送ろう」と書いている、そのガーディアンのこと」から、プレス、トン、その他で、ショート・タイムがまた行われていることもわかるだろう。まもなくふたたび、一般的となるだろう。製造業者たちは現在の価格ではたいはいのばあい損をしている。紡績業者は、まだどうにかやっつけてゆくことができる。また、数はすくないがいくつかの品目では、具合よくやっぐる（die Spinner können noch eben bestehen ; in wenigen Artikeln gut bestehen）。値上がりによって需要が抑えられるようになるやいなや（現在までのところは、価格がもっと上がるのではないかと懸念して、需要が一時促進されているのだ）、これも「ある部門ではうまくいっていることも」おしまいとなり、そしてもとのところに戻ることになろう」（傍点―三七）。

同年四月九日付同じくエンゲルスからマルクスへの手紙。「生産物の変動（Fluktuationen）はまったく東風と西風とに左右されるだろうという、またオルレアン綿花中等品が六ペンスをこえていては規則的なかつ景気のいい商売なんかは考えられないという、僕の予言ははつきりと実証された。綿花については、第一の予言が的中したことは、同封しておいたオルレアン中等品について君に以前送った表の（ア）の続きを見られれば明らかだ。砂糖、コーヒー、および茶も同じような動き方をした。ただこれらはまだ在庫品がひじょうに多いので、在庫品がすくなかった綿花のさいに可能だったような一時的な強い騰貴はおこらなかつただけだ。第二の予言にかんしては、相変らずシ

ハ、ト、タイムヤストライキヤ生産が割に合わないための休業がかなり行われている。そして収穫が提供するのは三〇〇千梱であるのに、生産をフルに行うには現在すくなくとも三五〇千梱を必要とするのであるから(8)その他の木綿工業国でもその割合だ〔die übrigen Baumwollproduktionsländer im Verhältnis〕、政治的な騒動(Konvulsionen)は度外視しても、木綿工業をもち返させようとすゝめる試みは今年の末までは原料の価格騰貴によつてはばまれるであらう、——二月の末および三月はじめに(表を見られたい)じっさいにそうだったように——。諸価格は一般的に見て——さし当りはおそらくちよつと下落するかもしれないが——値上がりするだらう。しかしそれは値上がりすると同じ割合で生産が制限されることを伴つてのことだ。以上は大陸でなんの騒ぎ(Row)も起らないと仮定してであるが、しかしそれはたしかに起ると見ていい(der aber so gut wie gewiß ist)。(10)二月十九日から二十六日の一週間の間にリパブルに着いた各種の綿花は六十二梱にすぎなかった！その他のときも相変らず何千というところだ(11)(12)(傍点—三宅)。

(4) 前掲のように一八五七年十一月十五日付の手紙のなかでエンゲルスはつぎのように述べていた、「綿花が封度当り六ペンスにならなければ、当地の木綿工業は一時的な立直りもまったく可能でない。そして現在まだ七 $\frac{1}{4}$ ペンスだ」と。これにたいしてマルクスは同年十一月二十四日付でエンゲルスにこう書いていた、「君は手紙のなかで、工場主たちは綿花が六ペンスにならなければ進んでゆけないと書いている。だが、大きな生産制限は綿花価格を必然的にまもなくこの点にまで押し下げるのではないだろうか？」と。そしてその返事の同年十二月七日付の手紙のなかでエンゲルスは重ねてこう述べていた、「綿花は現在中等品で六ペンス9/16だが、まもなく六ペンスになるだらう。だが当地の製造業者がふたたび全時間操業ができるのは、この全時間操業による生産の増大によつて「綿花にたいする需要が増大して」価格がふたたびすくなく六ペンスをこえて騰貴しないようになつてからのことだ。だがいまではすくなくそうなるだらう〔現在のところではたとえ六ペンスに下がっていったとしても、もしフル・タイムをやれば綿花価格はすくなく六ペンスをこえて騰貴してしまうだらう、という意味〕と。

- (5) Manufacturers, 織物業者を指しているのである。これまで見てきた手紙のなかでもエンゲルスは Spinner und Weber と記したり、Spinners and Manufacturers と記したりしている。spinner にたいして cloth manufacturer が略して manufacturer と呼ばれていたのでもあらう。なお Spinner und Fabrikanten とも記してゐるが、またたんに Fabrikanten としてどちらということなく両者を含めていつているばあいもある。
- (6) 東風がつづけば綿花の価格が上がり、西風が吹くようになれば綿花の価格が下がる、東風がつづけばすべての生産物の値が上がることはたしかだが、西風が吹くようになればそれだけはげしく値下がりが生じるだろう、といったことを述べていたわけである。——前掲一八五七年十二月三十一日付および一八五八年一月六日付の手紙。
- (7) 既述の一八五七年十一月十六日付でマルクスに送った「一八五七年一月一日以来のオルレアン綿花中等品の価格の足どり」の表。これはイングランド銀行条例が停止された十一月十二日に六ペンス迄まで急落したその翌十三日のところまで記してあった。前のこの表は『往復書簡集』に収められていたが、上記のその「今日までの続き」の表は収められていない。
- (8) なお Hughes ; op. cit. p. 82 所載の Thomas Ellison ; The Cotton Trade of Great Britain, 1886 から採った表によると、ブリテンの綿花輸入高は一八五六—一八五八年当時約二百五十万梱——アメリカでの綿花収穫高はこれまで見てきたところでも三〇〇—三五〇万梱であるが——、また消費高は約二百万梱であった(輸入高と消費高との差は再輸出があったため)。生産設備が原料供給に比していちじるしく過大となっていたわけである。なお『資本論』第三卷、S. 116 に掲げられている一八五八年十月の『工場検査官報告書』からの引用参照。
- (9) 当時アメリカ合衆国そしてとくにヨーロッパ大陸での木綿工業の発達も顕著で、世界の原料綿花消費のなかでこれらの国々の占める割合を増大させつつあり、そして他方イギリスの占める割合はすこし下がりがつつあった。——Hughes ; *ibid.* pp. 87—88。
- (10) こうした大陸の政治情勢の判断の点について付言しておく、エンゲルスはこのすこし前の一八五八年三月十七日付マルクスへの手紙においてルイ・ボナパルトの地位は危い状態にあるとし、つぎのように述べている。——「軍隊においてさえじつさいにボナパルト派であるのはただ先端だけだ。……親衛隊は残念ながら強い。……それは四十ないし五十門の大砲をそなえた全部で一万八千ないし二万の人員であつて、正規兵が動揺しようなばあいにかなりの支柱の役をするに足る堅固な核心をなしている。かつまた万事が部隊を地方から急速に集中するように準備されているので(フランスの鉄道地図を見ただけでもわかるだ

るう)、動きがあらかじめ予期されているようなばあいには、たしかに六万ないし八万の人員と相対いすることになる。この大軍に勝利をうるには二つの手段しかない。すなわち軍隊自身の内部の秘密結社か——そしてこれは数多くなくてはならぬ——、あるいは二月(一八四八年二月)のときのようなブルジョアジーの決然たるアンチ・ボナパルト的登場である。これらの条件の一つ、もしくは両方がなくては、勝利が可能だとは思われない。軍隊の下の層の方は赤派によって、上の層の方はオルレアン派と正統派によって掘り崩されることはたしかだ。また不審人物逮捕法(*Loi des suspects*)がその他の措置とともにブルジョアジーの生活を不可能にすることも同様にたしかだ。ブリストラパ(ルイ・ボナパルト)の増大しつつある困惑は、彼を日に日により絶望的な事柄に追いやるだろう。プロイセンと戦う危険はおかせないし、イタリアは釘づけにってしまったし、ブリストラパの社会主義はもはやだれも信じないし、アルジェリアはもう戦場を提供しない。人々の目を他にそらせるすべての道は絶たれてしまっており、残されているのは抑圧を強めることだけだ(*reste la répression croissante*)。それはとりもなおさずブルジョアジーを革命にまっすぐ追いやることだ。オルレアン派と正統派にとっては、もし周囲の事情で両党の一つがただちに勝利をえられそうでないばあいには、共同支配のもとの立憲共和制の回復ということが、すでに現在最寄りの逃げ口として遠望されているにちがいない。ひとたび蜂起が勃発せんか(*Le cas de soulèvement donné*)——そしてそれは今年中にくるにちがいない——、……彼らが一八四八年の二月にならってやるあらゆる機会が存している。そしてそのときこそ、なにが起るかをわれわれは見るであろう。彼らがボナパルトにたいする恐れから、反乱が勝利を占めるにちがいないほど軍隊を動揺させてしまいうやいなや、こんどはプロレタリアにたいする恐れから、彼らは軍隊をふたたびつくり上げて反乱を打倒せねばならぬとするだろう。——だがすでに遅い——、流れは彼らをこえて進み、軍隊はポカソとして傍観するだろう。そしてそのときこそ、われわれは、去る一八四八年の春の氾濫以来、水がいくばくの台地を占領したかを知るであろう。／＼フランスの商業は現在幸いにも、慢性的恐慌が政治的革命において頂点に達するより前には、改善されえない状態にある。僕はブリストラパが政権を握っているかぎり、フランスの商業状態がよくなることはありえないと思う。……／＼プロイセンの状況はきわめて腐っているように見受けられる。……僕はプロイセンでは、プロレタリアートがまったく大きな進歩をしているのでないかぎり、王室を排除することはけつて容易なことではないと思う。ブルジョアジーと俗物ども(*Spießbürgertum*)はともかく一八四八年以来より愚劣になつてしまっている」云々と。なおここでエンゲルスが書送っていることは、『トリビュン』に寄せたこの翌日付、つまり一八五八年三月十八日付のマルクスの通信「ボナパルトの現在の立場(Bonaparte's Present Position)」(『トリビュン』同年四

月一日号所載)のなかに、すこし調子を変えて、採り入れられている(大月選集訳、第十卷、三四—四〇ページ)。

フランスについてエンゲルスが右のような見方をしていたが、またマルクスもこのすこしあとの三月十九日付エンゲルスへの手紙のなかで、「フランスでは騒ぎ(Tras)がきわめてすばらしく進行している。この夏を越して平穏がつづくことはむずかしいだろう」云々と述べている。

(11) さきの註(7)の表で見ると一八五八年——これは暦年か綿花年度かわからないが(綿花年度であればこれは一八五七年九月一日から一八五八年のそれにいたるもの——「一八五七年恐慌」(2)の註(3)——)の綿花輸入高は二、四四二千梱となっている。リバプール以外の港から入るものもあるわけであるうが、これを年間一律に週で割ると、一週間に四—五万梱という計算になる。

(12) この一八五八年四月九日付の手紙のなかの上に掲げた前のところで、エンゲルスは一八五七年につくられた Cotton Supply Association についてつぎのように述べている、「昨日ガーディアンを二部送った……もつとずつとすてきなのは Cotton Supply Association [綿花供給協会]の記事だ。自由貿易論者が自由貿易実施十年後に正面からそれを否定しているのはおもしろい。この Cotton Supply Association なるものは、地味と気候とがぜんぜん不適當でないかぎり世界のあらゆる場所において、自由貿易とは正反対に、奨励金や前貸や、種子の贈与、機械の貸与、等々によって綿花栽培を押し進めようとする、自由貿易論者たち自身によって設立された機関にはかならない。もしそんなことを国家がやるなら弊害があるが、アフリカのニグロやベドウィン人(砂漠を流浪するアラビヤ人)、等々にたいして彼等自身の王よりずっと縁遠い関係に立っているところの、マンチエスターの綿紡績業者がそれをやるなら、まったくいいというのだ。あらゆる自由放任の文句にたいするこの記事以上にみごとな風刺はお目にかかれまい。アメリカの綿花からつくられたイギリス商品の輸入はほとんどあらゆる爾余の国の綿花栽培を破壊してしまった、だからそれをいま人工的方法でふたたびつくり出さねばならない! という告白もまたすこぶるおもしろい。これらの憐むべきイギリス人たちは、自分たちの綿糸紡績および織布の独占については、なにか偉大かつ自然的なもの——それになりたいなにととも異議を挿みえないような——と思っているのだが、しかしそれと同じ世界市場によってもたらされた合衆国の綿花栽培の独占は、アンチ自由貿易的措施を採ってさえ破壊されねばならないとするのだ!」云々と。

アメリカの綿花産出高は一八五〇年から一八六〇年の間に一〇〇パーセント以上増大したが、イギリスの生産力の増加はいちじるしく、かつ他の国々での原綿消費量の増大も加わり、綿花が——さきにも記したように——相対的に不足となっていた。ま

た木綿工業を左右する原料生産が他国の手に握られていることにたいする不安もあり、一八五七年における綿花不足の強まりから——この年の春ごろには前述のように木綿工業ではシヨート・タイムが広く行われるようになっていた——、この Association が結成され、インドその他世界のどこといわず綿花栽培を助成することが提案されていた。——Hughes : *ibid.* pp. 89—90. いま一八五八年四月ごろあらためてエンゲルスがこの Association について右のような皮肉をマルクス宛に記しているのはどういうわけかわからないが、ガーディアンになにか大きく同 Association の記事があったので書いてみたのもあろうか。

さきの一八五八年一月六日付の手紙でエンゲルスは「すくなくともマンチェスターと木綿工業にかんして」は「あたらしい転換」がきているとし、生産と取引とがすこしずつ動き出していることを告げ、また七日付の手紙ではマンチェスターではまだシヨート・タイムが強く行われていることを告げていたが、そのあと、右に掲げたように、同月二十五日付の手紙では紡績業者たちはフル・タイムをはじめていると記している。そしてこれは需要があるためではなく、みながそうしはじめたし、またシヨート・タイムにすっかり飽きてしまったためだと述べている。また二月十八日付の手紙では、こうしたフル・タイムのため綿花の価格が非常に騰貴してしまい、製品はそれにつれては上がないので、ふたたびシヨート・タイムをやるうとしていと記している。三月一日付の手紙では、織物の方は損しているが、紡績業者たちは、需要が目下より値の上がることを懸念して一時促進されているので、どうかやってあげている——一部では具合よくやってゆけている、と記している。また四月九日付の手紙では、綿花の高値のため相変らずシヨート・タイムがかなり行われているとし、製品価格も上がるだろうがしかしそれには生産制限が必要だと記している。そしてそこで、「木綿工業をもち返えさせようとするあらゆる試みは、今年の末までは原料価格騰貴によってばまれるであろう」という見透しを述べている。

これらのエンゲルスの記述から、一八五八年一—四月当時の木綿工業は、すでに恐慌から脱け出しつつあったとはいえ、なお動搖的であった、ということを知ることができようであろう。

マルクスは『トリビュン』一八五八年五月二十日号所載の論説「イギリスの重要文書(Important British Documents)」(執筆日付四月三十日。大月選集訳、第九卷、一五五—一六三ページ)において、「最近イギリス政府は若干の統計文書——一八五八年第一四半期の商務省報告、一八五七年一月および一八五八年一月のイギリスにおける貧困についての比較資料、最後に半年間の工場検査官の活動報告を発表した」としてこれらについて見ているが、そこで「商務省の報告は、イギリスの貿易が一八五八年の最初の三カ月間に前年同期とくらべて輸出入ともに激減したことを示している」としている。前年同期に比して価額において輸出は約一九パーセント、輸入は——二月末まで——約三パーセント、それぞれ減少している。しかしそのなかで「一般原則からの例外をなして、イギリスの工場製品にたいする需要を増大している唯一の国はインドである」とし、そして「イギリスのインドへの輸出がある種の数品目について、たとえば毛織物について増大したことは、戦争の需要によって説明できる」が、しかし「全体としてのこの上昇傾向の理由」は「インドの反乱によって数カ月間インド市場が完全に閉ざされ、そのためにその地にあった商品がやがて吸収され、そしてその結果品不足となり、それがいまみだされつつある」ことだと述べている。

デリーは前年の九月に陥落したが、ラクナウもついにこの一八五八年三月にイギリス軍の手中に帰した。⁽¹³⁾そしてすでに一八五八年はじめに現われてきたこのインドの需要はその後大きな増大を示してくることとなり、右に見てきた木綿工業のその後の急速な回復もこのインドの需要が大きな要因となったものであった。

(13) なお、——「インドの反乱の第二の危機的な時期は終わった。その第一の時期はデリーを中心とするもので、これはこの都市

の強襲によって終りを告げた。第二の諸事件はラクナウに集中されていたが、いまやこの都市も陥落した。こんにちまで平穏であった地方にあたらしい反乱が起らないかぎり、インドの反乱はいまやその長たらしい終末期に移行せざるをえない」（大月選集訳、第八卷、「インドの反乱」、三五四―五ページ。『トリビュン』一八五八年四月三十日号所載、四月十五日付エンゲルス執筆）。

右の「イギリスの重要文書」ではこのあと工場検査官の報告書に触れているが、そこでは、この報告書は「一八五七年末までについてしか述べていない」ものであり、そして作製者たちは「工場閉鎖、操業時間の短縮、企業家の大量破産、さらにちようど報告書作成当時にはじまった（これは上の全部にかかる句であろう。誤訳？）一般的経済不況にさまたげられて、信頼できる正確な資料を蒐集しえなかった」といつている、だから「恐慌の結果を反映した工場統計はこのつぎの報告からしかえられないであろう」として、擦染工場における児童労働についての記述を紹介しているにとどめている。『工場検査官報告書』は当時年二回、それぞれ四月三十日、十月三十一日に終る半年間の報告書として作成され、そして十月三十一日に終る方はいつもその翌年になって刊行されていたようである（一八五七年恐慌^(註)、註(5)参照)。ここでマルクスが見ていたのは一八五七年十月三十一日に終る『報告書』であったと見受けられるが、⁽¹⁴⁾「つぎの」報告書である一八五八年四月三十日に終る『報告書』、つまり「恐慌の結果を反映」しているはずのそれについては、『トリビュン』に寄せた論説は見当らない（後掲の、大月選集第九卷一七一―一八八ページの『トリビュン』所載論説「イギリス工場工業の状態」においてマルクスが見ているものは、一八五八年十月三十一日に終る『報告書』である）。

ただ『資本論』のなかでこの一八五八年四月の『報告書』からも若干の引用がなされているが、そのなかでつぎのようにしるされているところがある。「恐慌は——そのさいには生産が中断されて、『短時間 (kurze Zeit)』しか、週のうち二、三日間 (während einiger Tage) しか作業が行われないのであるが——もちろん、労働日を延長しよ

うとする衝動になんら影響しない。なされる仕事が多くなければすくないほど、なされる仕事の利得が大きくなければならない。作業されうる時間が減少すればするほど、多くの剰余労働時間が作業されねばならない。かくして工場検査官たちは、一八五七年から一八五八年にいたる恐慌期についてつぎのように報告している、——『取引がこのように具合の悪い時期になんらかの過度労働が行われるのは矛盾していると思われるかもしれないが、状態が悪化していることは無法な人々を駆って違反を行わせる。かくして彼らは特別利潤を確保する……』。『私の管区で一二二の工場がまったく廃業し、一四三の工場が休業し、その他の工場が全部ショート・タイムで作業しているその時期に』——レオナード・ホーナーはいう——『法定時間をこえた過度労働がつづけられている』と。またハウエル氏はいう、——『たいていの工場では事業状態が悪いため半分の時間しか作業していかないにもかかわらず、私は、労働者たちが法律上保証された食事および休息時間を侵害することによって毎日半時間または¾時間を横取りされるという、苦情を以前と同じ数受けとった』と。『資本論』、Bd. I, S. 249—250。長谷部訳、青木版四二一—二二二。⁽¹⁶⁾

(14) 『報告書』が議会に提出され、それが刊行されて入手されるのは、作成日付の二、三カ月あとのようであるから、上の論説の執筆日付から見ても一八五八年四月三十日に終る『報告書』でなく一八五七年十月三十一日に終るそれであることは一応明らかであろう。しかし、そのばあい上記のようにマルクスによると「一八五七年末までについてしか述べていない」、つまり一八五七年末までについても述べているという点が不審に思われる。一八五七年はどうしたわけかこの前の『報告書』が一八五七年四月三十日でなく六月三十日に終る報告書となっていた(『資本論』インステイトット版第一巻末尾に付されている Literaturverzeichnis 参照)。このことから、十月のそれが表題は十月三十一日として、二カ月くり下げたところがつけ加えられていたのでもあろうか。またこの関連において、マルクスが採り上げているのが一八五八年四月三十日であるのも、普通の十月の『報告書』であったとすれば日付としてすこし遅いように思われる。こうしたことはいわずれにしても『報告書』を見てみればかたんに明らかかなことではあるが、備忘的に付記しておく。

なお、日付の点から見ても右のように推測されるのであるが、マルクスが上の論説「イギリスの重要文書」のなかでこの『報告書』から紹介しているのと同じことが、『資本論』第一巻 S. 421—2 のところで「Reports of Insp. of Fact. for 31st Oct. 1857」からとして引用されている。このことから、上の論説で採り上げていたものがまちがひなく確認される。ついでに記しておく、ここでは更紗捺染所での児童労働とその通学状況について記されているのであるが、「イギリスの重要文書」の大月選集訳ではこれがすべて印刷所ないし印刷工場と訳されている。Druck と云つても Printing と云つても二通りあるわけではあるが。

(15) 一八五八年十月の『報告書』のときレオナード・ホーナーの管区は——上の一八五八年四月のときも同じであったと思われるが——、「イギリスの工業中心地——全ランカシア、チェシアの一部、ダービーシア、ヨークシアのウェスト・ライディング、ノース・ライディング、およびイングランド北部の四州——を包含している」(後掲の『トリビュン』一八五九年三月十五日号所載論説「イギリス工場工業の状態」、大月選集訳、第九巻、一七二ページ)。

(16) さきに「一八五七年恐慌」(4)の一一八—一二八ページのところで、一八五七年十二月二十五日付エンゲルスへの手紙および『トリビュン』一八五八年一月十二日号所載の論説「フランスの商業恐慌」において、マルクスが当時のフランスの経済状況について述べていることを見たが、また本稿の註(10)のところでフランスの政治情勢についてのエンゲルスおよびマルクスの観測を見たが、いまここで、一八五八年の前半期にマルクス、エンゲルス兩人がフランスの経済状況についてどういう観察をしたかを、拾いながら見ておくこととしよう。

一八五八年一月二十九日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「フランスの状況はすてきた。小商人たち(Epiciers)が暗殺計画「オルシニのルイ・ボナパルト暗殺計画」にたいしてとった冷やかさは、奴っこさん「ルイ・ボナパルト」をすっかり怒らせてしまった。小商人たちのこの冷やかさの秘密はおそらく、なにか政治的な突発事件が自分たちを窮地から脱せしめるかもしれぬという願望を彼らが内心抱いていることだろう。連中の大多数は、ブリストラバの命令で動くところの銀行、割引組合、等々によつて自分たちの手形を更新してもらつた。しかし延期は廃棄ではない。フランスのブルジョアジーの大部分は、きわめて確實な商業的破綻を目前にいつつ、満期の日を憂慮の念をもつて待っている」(傍点—三宅)。

ここでエンゲルスに書いているのとはほ同じことを、マルクスはまた二月五日付で『トリビュン』に寄せた論説「ルイ・ボナパルトの終焉のはじまり」(『トリビュン』一八五八年二月二十二日号所載)のなかで述べている。「ボナパルトの即位の謎は、

一方では、敵対する諸政党が互いに相手を無力にしたこと、他方では、彼の行なったクーデターが経済界の繁栄期に入ったときと時を同じくしていたこと、に求めなければならぬ。それゆえ商業恐慌は、あらゆる階級、あらゆる政党の一時的な士気沮喪以外にはなんの精神的基礎もかつたことのなかった帝国の物質的基礎を、破壊せずにはおかなかつた。失業するやいなや労働者階級の間には、ふたたび現存政府にたいする敵対的態度が現われた。……パリのブルジョアジーは政治的危機を思いがけない運命の使者として歓迎するであらう。いまでは正確に知られているように、パニックの騒ぎのさなかに、政府の命令を受けて、フランス銀行は満期手形を全部書き替えた。——ついでにいえば、同行は一月三十一日にこの特惠をもう一度与えざるをえなかつた。この債務償還の停止はすこしも商業活動を回復させずに、パニックに慢性的な性質を与えたにすぎなかつた。またパリのブルジョアジーの、しかも大きな影響をもつ他のきわめて大きな部分、すなわち小金利生活者あるいは小さな定収入のある人々の階級は、取引所における大動揺の結果、完全な破滅に陥つた」(大月選集訳、第十卷、一一ページ、傍点一三宅)。

『トリビュン』一八五八年三月十二日号所載のマルクスの論説「フランスの経済恐慌」(執筆日付同年二月十九日ごろ——大月選集「著作年表」、一一五ページ。大月選集訳、第九卷、五七一六三ページ)。ここでマルクスは、「ルイ・ナポレオンがやつと持ちこたえている権力は、他の国ではすでに峠をこした商業恐慌がフランスでその極点に達するとき、ひどい打撃を受けるであらう」として、フランスでは恐慌がこんごもつと進行してゆくであらうという見透しを述べ、そして「物質的福祉が消え去り、普通それに伴う政治的無関心も消え去るとともに、第二帝国のこんごの存続を正当化するあらゆるものもまた消え去るであらう」と結んでいる。マルクスはまえの「ルイ・ボナパルトの終焉のはじまり」のところでこの政権成立の基礎がなんであつたかについての見解を述べていたが、そして「終焉のはじまり」としているのもこの見解と結びつきの判断であることが窺われたが、ここでも同様に、経済恐慌は政権の基礎としていたものをゆすぶることになる、したがってこの政権は存続の基礎を失ふことになるというわけである。

マルクスは恐慌がもつと進行する兆候を示しているもの一つとして、フランス銀行の一月最後の週と二月第二週との間の計数の増減を掲げ、ニューヨーク、ロンドン、ハンブルグのいずれでも「商業活動が低下するにつれて」金属準備が増加しているが、フランス銀行での金属準備の増加はこれと同じ現象であるとともに、フランスのばあいはこの買入れにプレミアムをつけて流入を「人為的に」高めているとし、銀行券流通高と割引とが減少していることは商業の「一般的不況」の存在を示しているが、右のプレミアム支払総額が目立って増加していること、満期手形の保有高が増加していること、と同時に預金が減少してい

ることは、恐慌がもっと進行することを示しているのだと指摘している。またそのあととところでマルクスは、さきにも述べていたフランス銀行による手形の書き替えについて——再三このことについて記しているところを見るとマルクスはよほど気になっていたのであろう——こう記している。フランスでは商工業が不況であるのに、「他の国々では平均三〇—四〇パーセントがた低下した価格が、フランスではいままお、一般的恐慌に先立つ時期の投機的水準を保っている。このような経済的奇蹟がどのような方法で達成されているかと問う人があつたら、その答えはいともかんたんである。すなわち、政府の圧迫から、フランス銀行は期限のきた手形と貸付金とを二回にわたって書き替えることを強いられ、このようにして、地下室に貯蔵されていたフランス国民の資金が、同じフランス国民の犠牲において釣り上げられた価格を維持するために直接間接に支出されたのである。明らかに政府は、銀行券を必要としているどこへでもそれを分配するといういともかんたんな手続きによつて、破局を最終的に喰ひ止めることができる、と考えていた。だがじつさいのところは、この詭計の結果、一方では低落した価格が消費者の減少した資金と一致せず、そのため彼らの逼迫が一そうはげしくなり、他方では、税関倉庫に莫大な滞貨ができ、それはいずれは必要に迫られて市場に投げ出され、そして自分自身の重みで崩壊するようになるだろう」と(傍点—三宅)。そして一八五七年十二月末現在フランス税関倉庫にある商品量が一八五六年、一八五五年のそれぞれ年末に比し大幅に増加している統計を掲げ、「それは、フランスが将来遭遇するにちがいない物価の破局的な自己調節作用を、一点の疑いもなく示している」としている。

右で述べているのと同じことを、マルクスはまた二月二十二日付エンゲルスへの手紙のなかでも書いている、——「この間モニトゥール〔紙〕に出た報告によると、フランスの税関倉庫に貯蔵されている商品は、一八五六年および一八五五年と比較すると、莫大なものであることがわかる。そしてエノノミストの通信員は直截にこういつている、ボナパルトはフランス銀行をしてこれらを担保に貸付けをさせ、それによつてそれらの保有者にそれらの支払をすることをえせしめた、と。しかし春が近づくとつれ、これらの商品は市場に投げ出されねばならない。そのときはフランスで崩壊 (crash) が生じることが疑いないことであり、そしてそれはベルギー、オランダ、プロシアのライン地方、等々での崩壊によつて応答されるであろう」。

なおエンゲルスも一八五八年三月十七日付マルクスへの手紙——さきに註(10)で見た手紙——のなかでこの手形書き替えについてつぎのように述べている、——「手形延期は莫大な損失をもたらすにちがいない。恐慌をのりこえようとするかかる手段は、事態の回復が産業においても現実的であるときにのみ、効果をもたうるのである (kann nur helfen, wenn die reprise des affaires auch in der Industrie wirklich ist)。たんに貨幣市動が緩慢 (easy) であつても、なんらの信用も持つて

いない者には効果がない、——そしてフランスでは現在、以前に与えた信用の延期以外には、信用を与えようとする者はいないと思う(傍点一二宅)。

二三

以前閑説しておいたように(たとえば「一八五七年恐慌」(四)の註(11))、一八五七年二月からイギリス議会に一八四四年のイングランド銀行条例にかんする委員会が設けられ、同委員会は同年三月十日付で中間報告を出したあと、同年七月三十日付で報告書を出した。ところが同年秋に、これまで見てきたように恐慌が生じ、十一月にはイングランド銀行条例が停止されるにいたった。そこで右の委員会は「最近の商業的窮境の原因、ならびにそれはどの程度に一八四四年のイングランド銀行条例によって影響を受けたか」という調査項目を追加して、ふたたび一八五七年末に設置されることとなった。この委員会の報告書は一八五八年七月一日付で出された。マルクスは後年『資本論』のなかで右の一八五七年七月三十日付の報告書および一八五八年七月一日付の報告書を大いに使っているが——しかしあとの一八五八年七月一日付の報告書からは委員会自身の報告本文は引用されているが、証言はほとんど使われていない——、この一八五八年七月一日付の報告書が出た当時、これを『トリビュン』への寄稿材料として用い、つぎの三つの論文を書いた。——『トリビュン』一八五八年八月二十三日号所載「一八四四年のイングランド銀行条例の効力停止」、八月二十八日号所載「商業恐慌と貨幣流通」、十月四日号所載「イギリスの商業と金融」(執筆日付はそれぞれ、八月六日、八月十日、九月十四日。この三つとも大月選集第九巻に訳出されている、一二三—九ページ、六四—七〇ページ、七一—七二ページ)。

第一の論説「一八四四年のイングランド銀行条例の効力停止」——そこにおいてはマルクスは、恐慌前の一八五七年

七月三十日付の報告書では経済状態はまったく「健全」かつ「無事」だと言明していたものだとまず皮肉をいい、ついで通貨主義に拠ったこの条例のその通貨主義の基礎的誤りを指摘し、また「イングランド銀行は、一八二五年および一八三七年の金準備にくらべて、二倍ないし三倍の金を持っていたのに、サー・ロバート・ピールの条例のために、一八四七年および一八五七年には破産の瀬戸ぎわに立った」という事実を指摘している。そして、「利子率の引上げまたは引下げは——イングランド銀行は貨幣流通に影響を与えるのにこれ以外の手段はないと認めているが——一八四四年の条例の公布前にも適用されたし、またむろんその条例の廃止後にも適用されうる処置である」としてこの条例が無用のものであることを示唆するとともに、おわりに、この条例は「平常の時代」には「死文」であり、「一般に効力をもちうる唯一の瞬間」である恐慌期には政府の指令でこれを停止していると痛烈な皮肉を飛ばしている。

第二の論説「商業恐慌と貨幣流通」——そこにおいてはマルクスは、恐慌を「過度の銀行券発行に結びつけている俗流的な考え方」の誤りであることを、右報告書に掲げられている銀行券流通にかんする統計数字を用いて明らかにしようとしている。そしていう、発券銀行、たとえばイングランド銀行のような銀行も、公衆の手中にある貨幣流通量、つまり流通している銀行券の総額をきめることはできない、「銀行が商業の一般的方向と価格のうえに与えたかまたは与えることのできた影響というのは、疑いもなく、預金の操作、すなわち信用取引によって実現されたものであって、過度の銀行券発行によって実現されたものではない」と。

第三の論説「イギリスの商業と金融」——そこにおいてはマルクスは、右の第一、第二の論説のあとを受けて、「だがそれなら、いったい恐慌の真の原因はなんであったか、という問題が生じるであろう」とし、委員会は「この国における最近の商業恐慌は、アメリカおよび北部ヨーロッパにおけると同様に、主として過度の投機と信用の濫用

とに負うものであった」(これは“Report”の本文の最後の No. 28 から引用されたものである)といっているが、この命題は正しいとしても、はたして与えられた問題に解答を与えているものだろうか、問題はむしろ、この過度の投機や信用の濫用などの「これらの要因をほとんど規則正しくあらたに呼びおこしている社会的諸条件はいったいどのようなものであるか」という点にあるのだとしている。そして社会がこれらの現象を規制しうるか——そのばあいには社会は恐慌を未然に防ぐことができる、それともこれらの現象は「現在の生産制度に固有のものであるか」——そのばあいいは現在の制度が存続するかぎり恐慌は季節の移り変りと同じように到来するであろう、としている。そしてまたいう、恐慌にかんする議会の報告書はいつもそれぞれの恐慌を、それぞれの恐慌に独特な——ないし独特であるように見える——諸要因によって説明される「孤立した現象」として取扱っているが、「それぞれのあらたな商業恐慌に固有な諸特徴によってすべての恐慌に特有な特質がぼかされてはならない」と。このようにマルクスは「いったい恐慌の真の原因はなんであったか」ということについていわば考え方の糸口を説き、そしてこの論説ではそこまでにとどめ、ついで信用の濫用がいかに行われていたかを、委員会報告書から紹介することに筆を移し、一八五七年十月に破産した Liverpool Borough Bank、十一月に破産した Western Bank of Scotland および Northumberland and Durham District Bank などの経営紊乱の様子について述べている(マルクスがここで述べていることは“Report”本文の No. 43 から No. 54 あたりに見出される)。

なおマルクスはこうした株式銀行の経営紊乱について紹介したのち、「これらの株式会社組織は、現代社会の生産力発展における強力な楯でありながら、個人的責任の感情にかわって固有の団体的意識をつくり上げるまでになっていない」という株式会社制度についてのきわめて注目すべき発言をしている。

さきに見たエンゲルスへの手紙から窺われたように——一八五七年十二月八日付および同月十八日付の手紙——マルクスはちょうど恐慌勃発のころ以来、『グルントリッセ』を書きつける仕事にはげしく従事していた。

『グルントリッセ』の *Einleitung* はだいたい一八五七年九月に書かれたが、七冊からなる貨幣の章、資本の章の原稿——ドイツ版で S. 33 から S. 764 にいたる——は一八五七年十月からほぼ一八五八年三月までの間に書かれたものであって、当時いかに文学どおり猛烈に仕事をしていたかが想像される。そして一八五八年四月二日付エンゲルスへの手紙でマルクスは『経済学批判』の *first part* の *short outline* を告げつつ、身体具合が悪いといったが、同年四月二十九日付エンゲルスへの手紙ではもはや仕事が可能であり、「僕は明らかにこの冬夜業をやりにすぎた」と書いている。このため五月に入ってマルクスはマンチェスターのエンゲルスのもとに保養に行ったが、ロンドンに帰ってから同月末、原稿の *index* をつくらねばならないとエンゲルスに告げている。これはドイツ版の S. 855—867 に掲げられている *Index* である。そのあと一八五八年九月二十一日付エンゲルスへの手紙では、前に書いたものの文体をととのえる仕事をしているとしている。これはドイツ版の S. 869—947 に掲げられている『経済学批判』の *Urtext* であるが、一八五八年十一月二十九日付エンゲルスへの手紙においていよいよ第一冊の印刷用の原稿を書いていると告げている。そしてこれはこえて一八五九年一月二十一日に完了し、現行『経済学批判』として同年六月に出版されるにいたったわけである。マルクスはこのころ、基本的にはこういう仕事をしてきた。

ところで、さきの一八五八年四月九日付エンゲルスからマルクスへの手紙のあと、『往復書簡集』に収められてい

るなかにはイギリスの経済情勢について書いている手紙はしばらく見られないが、一八五八年八月十三日付の手紙のなかでマルクスはエンゲルスにつきのように書いている。——「マンチェスターでの取引はふたたび上向きになってきているのではないだろうか?」(ここ二、三週間以来 (seit den letzten Wochen) 世界は一般にふたたびおそろしく楽天的になってきた)。エンゲルスのこれにたいする返事の手紙は残されていない。だが、このあとマルクスからエンゲルスに送った二通の手紙のあと、一八五八年十月七日付マルクスへの手紙のなかでエンゲルスはつぎのように書いている。

「当地の商売はまったく非常に景気がいい (Das Geschäft hier geht ganz kolossal gut)。六週間、このかた紡績業者は太糸品および中等品において、三年來彼らが儲けていたよりも封度当り一ペンスないし一¼ペンス多く儲けている。「六週間このかたというと八月下旬ごろからということになる。つまり右の八月十三日付の手紙でマルクスが感じていたようなあたらしい事態が大きく現われてきたわけである」。そしてリバプールの連中が綿花にたいして¼ペンス多く受取ることができるようになり、当地の糸の市場が一ペンス騰貴するという、まだ聞いたことのないようなことが生じている。十日ないし十二日前から多少停滞が出てきているが、しかし紡績業者たちはみなかなり長い期間について契約ができしており、需要は価格を完全に維持するに足るほどいぜんとして強い。こうしたことがもうしばらくつづくならば、賃銀値上げの運動がはじまるだろう。フランスでも綿紡績業者はすこし前からここ数年にない儲けをえている(このこととはたしかだ。僕はそのことを自身向うにいたある綿花代理商から聞いたのだ)。かの地のそのほかの商売の様子はどうなのかははっきりはわからないが、証券取引所の状況は根本的な好転を物語っている。⁽¹⁷⁾これらすべては馬鹿に楽天的な様子を示している。そしてもしインドやシナ向けのところでひどい過剰生産が起らないとすれば、この状態は

まだどのくらい長くつづくものなのかまるでわからない。インドでは現在商業がすばらしく繁昌しているにちがいない。前々週のボンベイ便は——十四日間に——三十二万反の綿織物が売れたことを報じ、前週の便はさらに十万反売れたことを報じている。連中は「インドにおいて、マンチエスターで仕入れられ、そしてまだ船積みされていないことがわかるとすぐに、すべてもう引渡すことにして売ってしまった。僕には、インドとシナとは、当地の俗物どもの話し振りや市場の状況から推して、過剰生産のための最寄りの口実を与えるべきもののように思われる。そしてこの冬よくなるなら、春には放漫な信用供与や空手形の使用などもふたたびさかに行われるようになることはたしかに予期されることだ。／＼……⁽¹⁸⁾ともかく、恐慌がひきおこした大量の過剰生産物がどういうふうにして吸収されるにいたったのか僕にはぜんぜんわからない」といわざるをえない。あれほど大きかった津浪がかくも急速にひいたことはかつてなかったことだ（Ich muß übrigens doch sagen, daß mir die Art und Weise, wie die überproduzierte Masse, die die Krise hervorrief, absorbiert worden ist, durchaus nicht klar ist; ein so rascher Abfluß einer so heftigen Sturmflut ist noch nie dagewesen）」（傍点—三七）。

一八五八年十月八日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「目下世界貿易が楽天的な転換をしているが（ロンドン、パリ、およびニューヨークの諸銀行における巨額な貨幣蓄積は、事態がオール・ライトといいうるにはまだほど遠いことを示しているとはいえ）、かかるさいに当って、ロシアで革命がはじまったということはすくなくとも慰めになる（農奴制廃止の運動のこと）」⁽¹⁹⁾。

一八五八年十月二十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「商業は当地では四週間このかたすこし停滞気味だ（つまり九月下旬ごろからということになる。前掲十月七日付の手紙のなかで「十日ないし十二日前から多少停滞が出てきている」と

記していたが、それがつづいていたのである。この間どの紡績業者も糸の下落と綿花の騰貴とによって、封度当り $\frac{1}{2}$ ペンスその利潤を失っている。だがそれでもなおいい商売になっている(Sie machen indes noch immer ein gutes Geschäft)。そして、綿花がふたたびいくらか下落するならば——これはじつさいありうることだ——、需要がすこしでも増大しさえすれば彼らはかつての地位(alte Stellung)をとり戻すことができる。すでにあちこちで賃上げを求める労働者運動の兆があらわれている。もしいまのいい商売がつづくならば、この兆はもっと強くなってくるだろう。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾
う。(俵卓一三宅)。

前に見たように一八五八年——四月のころは、木綿工業は改善の兆があったとはいえまだ動搖的であり、一八五八年四月九日付の手紙のなかでもエンゲルスは、「木綿工業をもし返えさせようとするあらゆる試みは、今年の末までは原料の価格騰貴によってはばまれるであろう」という見透しを述べていたのであったが、右の手紙で見ると、木綿工業の景気は八月ごろから上向きとなり、十月七日付の手紙において「六週間このかた」紡績業者はここ「三年来」なかったような儲けをえている、「当地の商売はまったく非常に景気がいい」と告げるような好況状態を現出してきたわけである。ここでエンゲルスが「三年来」なかったような儲けをえているとしつつ、十月二十一日付の手紙でもし綿花がいくらか下落するならば、需要がすこしでも増大しさえすれば「かつての地位」をとり戻すことができるといっているのは、木綿工業の利潤は恐慌の二、三年前からよくなってきていたからであり、いま急速に好況となり「三年来」ない儲けをえるようになったが、もうすこし好転すれば一八五〇年代はじめのような地位を回復しようといっているわけであろう。

なお、インドについては前に記したが、シナについてはいえば、マルクスはこれよりさき『トリビュン』一八五八年

九月二十日号所載の論説「阿片貿易」(執筆日付八月三十一日)のなかでつぎのように述べていた。——「連合国の全權代表がシナから奪いとったあたらしい条約についての知らせは、一八四五(一八四二?)年第一次シナ戦争が終ったときに商人たちの空想に浮んだのと同じような大々的な貿易拡張の予想を生み出したように見える。……貿易場の数が増加すれば、それにつづいてかならず対シナ貿易が増大すると確信することができらるだろうか? 一八五七—五八年の戦争が一八四一—四二年の戦争よりもっとすばらしい結果をもたらすという確実性があるだろうか? ただ一つたしかなことは、一八四三(一八四二?)年の条約が、シナにたいする英米の輸出を増加させるかわりに、ただ一八四七年の商業恐慌を促進し深めるのに役立ただけであったことである。それとまったく同じように今回の条約も、無限の市場にかんする夢想を呼びさまし、投機的取引を刺激することによって、最近の一般的震撼からの世界市場の回復が遅々として進んでいないときにあたらしい恐慌の準備を助けるおそれがある」(大月選集訳、第八卷、六八—九ページ)。そしてまた同年十月五日号『トリビュン』所載の論説「英華条約」(執筆日付九月二十日)のなかでも一八四〇年代の対シナ貿易の統計を挙げ、「新市場が開かれたさいに現実の需要すなわち消費者の購買能力を正確に計算しないで無分別にも法外に大量の商品を投入」するということは「世界市場史につねにある現象」であることを指摘し、またそこでつぎのように述べている、——「ナポレオンが没落しヨーロッパ大陸の封鎖が解かれたとき、イギリスから大陸向け輸出が大陸の受入能力にたいしてあまりに不釣り合いに大きかったので、『戦争から平和への移行』は大陸封鎖制度そのものよりも反って破局的であったくらいである。カニング(当時のイギリスの外務大臣)がアメリカ(中南米)におけるスペイン植民地の独立を承認したときも、また同様に一八二五年の商業恐慌を呼びおこした。……最後に現代にきて、弾力性に富んだオーストラリアでさえもすべての新市場に共通の運命——すなわちその消費能力と支払手

段に過重の荷を負わせるという運命を免がれなかつた⁽²²⁾と(大月選集訳、第八卷、八八ページ)。

(17) この手紙をエンゲルスが書いたすこし前、マルクスは一八五八年九月二十一日付の手紙のなかで、「エノノミスト誌の最近の報道では、フランスでの取引はここ数カ月好転よりもむしろ悪化している、といつている」とエンゲルスに書き送っていた。

(18) マルクスは一八五八年一月十四日付エンゲルスへの手紙のなかで、「友人ジョーンズのことをどう思う。奴っさんが身を売ったとは、僕はまだ信じたくない。……ジョーンズにとつてただ一つのいいわけになることは、イギリスの労働者階級にいまただよっているたんだ調子だ。ともあれ、いまの道を辿れば、彼は中間階級(middleclass)にだまされるか、裏切者になるかである」と書いていたが、一八五八年九月二十一日付エンゲルスへの手紙のなかでは、「われわれの友人ジョーンズは決定的にブライ特派に身を売ってしまった(しかも考えうるもっとも安い値で)。奴っさんは政治的に破滅した」とするすにいたつた。そしてエンゲルスは上の十月七日付の手紙のこのところで、このジョーンズおよびイギリスの労働者運動についてつぎのように述べている。——「ジョーンズの件は不快きわまることだ。……こうしたことを見ると人はじっさい、ふるい伝統的なチャーチスト的形態でのイギリスのプロレタリア運動は、あたらしい生活力をもつた形態で発展してゆくことができる以前に、完全に亡びてゆくにちがいないとほとんど思わないわけにはいくまい。しかも、このあたらしい形態がどんなものかは見きわめもつかない。ともかくジョーンズのあたらしい動きは、……イギリスのプロレタリアートが事実上ますますブルジョア化し、かくしてあらゆる諸国民のうちでもっともブルジョア的なこの国民がついに、ブルジョアと並べてブルジョア的な貴族とブルジョア的なプロレタリアートを持つようになりたいと思つてゐるらしいことと、事実上関連してゐるように思われる。全世界を収奪しているような国民にとつては、このことはもちろんある程度むりからぬことだ。このばあい救いうるものはきわめて景気の悪い年が二、三年やつてくることだけだが、それも金銀発見以来もはやそうたやすく来そうには思われぬ(diese scheinen seit Goldentdeckungen so leicht nicht mehr herzustellen)」。*

(19) マルクスはこの手紙の一週間ほど前の一八五八年十月一日付で、『トリビュン』に「ロシアにおける農民改革の準備」なる論説を寄せている、——「農奴制の問題はロシアで重大な転換をなしつつあるようである」(大月選集訳、第十卷、四二三、ページ)。この農奴制廃止の運動はこのあとさらに発展し、一八六〇年一月十一日付エンゲルスへの手紙のなかでマルクスが「僕の場合は、いま世界で進行している最大の事件は、一方では……アメリカの奴隷運動であり、他方ではロシアにおける奴隷運動である」とするすまでになっていた。そして周知のようにロシアにおける農奴制は一八六一年に廃止となつた。

なお上の一八五八年十月八日付の手紙のなかでマルクスは、「ブルジョア社会が二度目のその十六世紀を経験したことは、否定できないことだ。最初のがブルジョア社会をこの世につき入れたと同様に、こんどのはそれを墓場へ送り込むことを僕は期待している。ブルジョア社会の本来の任務は、世界市場を——すくなくともその輪廓を——打ち立て、この基礎のうえに立つ生産をつくり出すことだ。世界はまるいものだから、この仕事はカリフォルニアとオーストラリアとの植民、シナと日本との開国によって終りを告げたように見える」云々と述べているが、この「十六世紀」云々についてはまた、翌一八五九年九月十六日号『トリビュン』所載の論説「人口、犯罪、貧困 (Population, Crime and Pauperism)」(執筆日付八月二十三日)のなかでは、一八四九年から一八五八年にいたる十年間を特徴づける事柄として、金鉱が発見されたこと、東方の新市場が開けたこと、アメリカ合衆国へのイギリス製品の輸入が巨額となったことなどを挙げ、「全世界市場が全体として拡大され、おそらくその広さを二倍にも三倍にもしました」とし、これらは「この時代を十六世紀のもっともすばらしかった時代にさえ比較することを許すような事実である」と述べている(大月選集訳、第九卷、一九二ページ)。

(20) 既掲の Hughes ; Fluctuations, p. 101 に所載の G. H. Wood ; The History of Wages in Cotton Trade, 1910 から採った「一八五〇—六〇年における木綿工場労働者週賃銀」の表によると——週当りペンズ——一八五〇年一〇、五一年一〇二、五二年一〇四、五三年一〇〇、五四年一〇一八、五五年一〇二〇、五六年一〇二六、五七年一〇二七、五八年一〇二七、五九年一〇二七、六〇年一〇三九となっている。これではショート・タイムによる賃銀カットは出ていないわけであるが。

(21) さきに註(10)および(16)において、フランスの政治、経済情勢にたいしてマルクス、エンゲルス両人が一八五八年前半期に——恐慌以前にもそうであったが——いかに期待をかけていたかを見てきたが、一八五八年六月二十四日号『トリビュン』所載の論説「イギリスの政党とヨーロッパにおけるあらたな革命」(執筆日付六月十一日ごろ——大月選集「著作年表」)のなかで、マルクスはまだつぎのように述べていた。「すべてはフランスにかかっている。そこでは商業と農業との恐慌、金融上の大変動、および軍隊による支配が軍隊そのものの支配によって代えられたことが、爆発をやめている。フランスの新聞でさえ、ついに、好景気が回復するというあらゆる望みはさし当り断念しなければならぬことを認めた」と(大月選集訳、第十卷、六六ページ)。

だが上の一八五八年十月二十一日付の手紙のなかではエンゲルスは、そのまえの十月七日付の手紙でイギリスのプロレタリア運動に悲観的な見透しをしていたのにひきつづいて、大陸、そしてフランスについてつぎのように述べている。——「フランス

でなにこともおこらぬかぎり、プロレタリア運動はこししばらくの間、大いに震撼させうるにはまだあまりに脅威的でないように思われる。もしフランスでなにもおこらないならば——それは(なにかおこることは)クレディ・モビリエの株式状態では今日ほとんど期待できないことだ——云々と。そして一八五七年恐慌のさいはげつきよく、フランスの恐慌ははげしくならず——沈滞は長かったが——、また期待されたようなはげしい政治的動きはこのなかからはついに生じなかったのであった。

(22) この九月二十日付論説のなかでマルクスはまた対シナ貿易についてつぎのような指摘をしている、「対シナ貿易史を注意深く検討すれば、天上帝国臣氏の消費能力と支払能力が概していちじるしく過大に評価されたと思われる。零細農業と家内工業とをその基本的核心とするシナ社会の現在の経済構成の枠内で、外国生産物の輸入が多少とも注目すべき量に達するということは、とうてい問題になりえない」と(大月選集訳、第八巻、九一ページ)。なお一八五八年十月八日付マルクスからエンゲルスへの手紙参照。

さて、前記のようにイギリス木綿工業の回復は一八五八年春ごろのマルクス、エンゲルスの予想を裏切って、八月ごろから事態は顕著に好転に向い、急速に繁栄への道を進むこととなった。しかし、イギリスの経済が全般的にこのような急速な回復を示したわけではなかった。「一八五八年の委員会〔前述の銀行条例委員会のこと〕はあまり早くその調査を終らせたので、世界的拡がりをもった一八五七年の恐慌を説明するに十分な、ないしそれに明晰な論評を加えるに十分な諸事実を持ち合わせることができなかった。……一八五八年一月にエノノミスト誌は『かつてこれほどきびしい恐慌もなかったし、またこれほど急速な回復もなかった』と書いていた。だがこの急速な回復は金融中心地においてだけであった。産業のうえからは、また労働者の見地からすれば、一八五八年は十九世紀後半の最悪の年の一つであったのであって、おそらく一八七九年または一八八六年よりもっと悪かつた」(Clapham: Bank of England, vol. II, pp. 236-9)。「サー・ジョン・クラナムは一八五八年をきびしい産業的窮境の年であったと判定しているが、しかし木綿工業は一八五八年の不況の悲惨の大部分を免がれた。……経済の大部分が不況のなかに沈んでいた一八五八年

に、木綿製造業者は——その長い期間にわたった逆境のあとを受けて——その工場を稼働能力の限度いっぱい働かせていった。インドの反乱の終了は予想しなかった大当り (bonanza) たることを示した。『昨年は類のない商業的不況と陰鬱さをもってはじまり、恐慌の余震はあらゆる部門に強く感じられていた。だがそれが終る以前にわれわれは、思いがけずわれわれの前に東方から開けてきたすばらしい眺望に、目を眩まされた』(マンチェスター・ガーディアン紙、一八五九年一月三日号)。……インドの需要は一八五八年の早くからはじまった。ラクナウは一八五八年三月に占領された。……一八五七年から一八五九年までの間にインドへの綿製品の輸出は価額において二倍となった。／＼インドの需要は一八五八年の夏のはじめにすでに強かった。……一八五八年のおわりごろランカシアの工場は注文に応じるべく全能力をあげて作業していた。そして手持ちのストックは一八四二年以来の最低であった。一八五八年のおわり三カ月の綿製品総輸出の約四分の三はインド向けであった」(Hughes ; op. cit. p. 96)。

さきに一八五八年四月の『工場検査官報告書』についてマルクスが掲げているところを見たが、つぎの一八五八年十月三十一日に終る『報告書』については、マルクスは論説「イギリス工場工業の状態 (The State of British Manufactures)」を『トリビュン』一八五九年三月十五日号、三月二十四日号に寄せている(執筆日付二月二十五日、三月四日。大月選集訳、第九巻、一七一—一八八ページ)。

マルクスはこの『報告書』では未成年者や婦人の労働時間を法定基準以上に延長している現象の急激な増加がとくに指摘されているとして、主としてそうした事例を紹介しているが、そのなかでスコットランドの経済状況についてつぎのように記しているところがある。「スコットランド西部諸管轄区の検査官補佐の報告によれば、一八五七年に停止したいくつかの製紙工場は、まだ作業を再開しなかった。……織物捺染業は、まる一年を通じて営業不振であっ

た。サー・ジョン・キンケイド(Sir John Kincaid, スコットランド担当の検査官⁽²³⁾)が東部地区から受け取った最新の報告は、ダンディーとアープローズとは、相当数の工場が最近の破産およびその他の原因のため止っており、時間いっばい作業していると目されるその他の数工場でも、かなりの数の機械が動かずにいる、と報じている。このような事態は、多くは過剰生産、バルト沿岸諸国からの亜麻の正常な輸送の不足、およびこの事実によって呼びおこされた原料の高価格のせいに帰すべきである、と報ぜられている。恒常的工場就業人員数は縮小し、そしてじっさいのところ、亜麻紡績業者の間には、不況のつづくかぎり工場作業時間を一週四十二時間に短縮しようという努力が認められた。他方、毛織物生産地方、とくに年々増産している『ツウィード』と呼ばれる布地の生産地方では、ヘイウィック、ガラシールス、セルカーク等で活況が認められた。ここでは、手織業を除いて、すべての工業部門がフルに運転していた」と(傍点―三七)。

またマルクスは同じくこの論説のなかで、アイルランド担当の検査官ベーカー[R. Baker]の報告書は「災害事故をおこす原因の分析の点と商業の状態を特徴づける総括的要約の点とですぐれている」として、つぎのように記している。「ベーカー氏は、産業情勢はよくなつたと断言している。しかしながら彼の意見によれば、『その限界をこえると、工場工業は儲けがまったくなくならないまでも、だんだん利潤がすくなくなるといふ最高限にまで、たいていのところではふたたび達した』のである。原料価格と工場製品価格との関係の変化は、彼によれば、機械設備の増加とともに好景気の循環を呼びおこす主な原因の一つとされている」(傍点―三三)。そしてベーカーが例として毛織工業における羊毛価格の動きについて数字を挙げて述べているところを引用して掲げ、ついで、「だいたいにおいてベーカー氏は、紡錘および織機の数も、またその作業の速度も、ともに羊毛の生産とは釣り合いのとれない比例で増大し

ているという意見をもっているようである」と紹介し、「この点にかんしてイングランドには確実な統計がない」としてアイルランドおよびスコットランドの農業統計から羊の頭数について見ている。

(23) 当時、工場 Inspector はイングランド担当の Leonhard Horner と Alexander Redgrave、スコットランド担当の Kincaide およびアイルランド担当の Baker の四人から成つてゐた。

なおマルクスは『資本論』第三巻で利潤率と原料の価格変動について論じているところで、「生産の歴史において現在に近づくほど、ますます規則正しく、ことに決定的な産業諸部門では、有機的自然から引出される諸原料の相対的騰貴と、これから生じるその後の減価との、たえず反復される交替が見出される」として、工場検査官報告書からの例証を掲げているが(第三部第一篇第六章第三節)、そこでもこの『トリビュン』での論説で紹介しているベーカーの同じ記述が——引用の形で、かつすこし前後を拡げて——載せられている。この拡げられた箇所はちよつとおもしろい。——「事業状態はより良くなっている。しかし、好況期と不況期との循環は機械の増加につれて短くなるのであって、機械の増加につれて原料にたいする需要が増加するのと同じように、事業状態における動揺も一そう頻繁にくり返される。……目下のところ、コンフィデンスが一八五七年のパニック以後ふたび回復されているばかりでなく、パニックそのものもほとんどまったく忘れられているように見受けられる。こうした改善が持続するかどうかは、きわめて大きな程度において、原料の価格にかかっている。私の見るところではすでに、若干のばあいには最高限——それをこえると製造業がだんだん儲けがすくなくなり、ついにはまったく利潤をもたさなくなる最高限に、もう達している徴候がある。……私がこれまでの経験から知るところでは、信じられないくらい短期間に紡錘および織機がその数においてばかりでなくその運転速度においても何倍にもなっているのであり、さらにフランスへのわが

羊毛輸出はこれとほとんど同じ度合で増加しているとともに、他方国内でも国外でも、保有されている羊の平均年令がたえず低下している。……だから私は、人々がこうしたことを知らないで、一定の有機的法則にしたがってのみ増加される生産物の供給によって結果を左右されるような企業に彼らの熟練と資本を投じるのを見て、しばしば不安でならなかった。⁽²⁴⁾ あらゆる原料の需要供給の状態は……木綿業におけるいくたの動揺を、また同様に一八五七年秋のイギリス羊毛市場の状態およびその結果たる事業恐慌を説明するように思われる」(Bd. III, S. 144—5. 長谷部訳、青木版一九五一—六ページ)。

(24) ベーカーが「私のこれまでの経験から」といい、また「人々がこうしたことを知らないで」といっているのは、全体としての生産設備側の生産能力の増加と原料の供給事情とについてということであつたのである。マルクスが前記のように「この点にかんしてイングランドには確実な統計がない」としているのは事実上羊の頭数のことであり、また当時においても紡錘、織機の数や、品目別国別輸出統計がなかつたわけではない。

エンゲルスは『資本論』第三巻の編集に当つてこのベーカーの記述を掲げているところに、「われわれがベーカー氏とともに、一八五七年の羊毛恐慌を原料と製品(Fabrikat)との間の価格の不均衡から説明するのではないことは自明である。この不均衡はそれ自身では一つの徴候(ein Symptom)にすぎなかつたのであり、恐慌は一般的なものであつたのである」という脚註を入れている(a. a. O. S. 145. 同上訳、一九六ページ)。

一言付言しておく、——既掲の一八五八年のエンゲルスの手紙を見ても原料綿花の価格の動きに多大の関心が払われ、一見、工場においてシート・タイムをつづけるかフル・タイムに移るかが一にこの綿花の動きにかかつているかのようにするされ、また一八五八年夏以来の木綿工業の活況について述べているさいにも綿花の価格と綿糸の価格との開きに大きく注意が向けられていた。こうした記述からも、原料価格の問題はたとえば木綿工業においても毛

織工業においても、当時事実上生産、利潤を規定していた大きな要因であったことが窺われる。しかしたとえば綿花価格の騰貴について見ても、これは紡績、織布の生産設備の急速な拡張の結果であり、価格騰貴、原料不足が自然的なものではなかったことはいうまでもないが、それとともに、この原料価格の騰貴を抑えるために生産制限が採られたり、また原料騰貴によって利潤がすくなくなったりするのは、他方においてコストの増大を製品価格にそのまま移すことができないという製品市場での需要の制限があったからにほかならない。製品市場での需要が弱いさいには、他方で原料が高いばあい、製造工業の困難は倍加されることになり、したがって原料価格の高低の問題はとくにクロール・アップされてくることになるが、しかし事態の全体は原料の側にだけあるのではない。そしてまた、好景氣―設備増大―有機質原料の価格騰貴―恐慌という図式を描き、ここにおける「原料の需要供給の状態」によってなぜ循環が生じるかを説明し去ろうとするならば、それは循環にはずみをつける要因を一面的に強調するものというべく、あるいはまた「原料と製品との間の価格の不均衡」――これはそれ自体としては原料高と製品にたいする需要との結果として現われる現象にほかならない――によってなぜ恐慌となったかを説明しようとするならば、それは結果として現われる現象に捉われてこれを事態の原因と混同するものといわれねばならないわけである。

ところで右に見たのは一八五八年十月の『報告書』であるが、このあとの一八五九年四月の『報告書』、一八五九年十月の『報告書』――これらについて『トリビュン』に寄せた論説は見当らない（マルクスは後掲一八六〇年四月の『報告書』についての論説のなかで「一八五九年の工場報告書にかんする通信のなかで私が指摘しておいたように」云々（大月選集訳、第九巻、二二〇ページ）といっているのであるが）――からマルクスが『資本論』のなかに書き抜いているところを見ると、そこでも事業の活況、不況と原料価格の動きとの結びつきについてつぎのように述べられて

いる、——もっともこれらはいずれも右で見たペーカアのそれと同様に原料の騰貴と減価との交替の例証として掲げられていたものであるが。「スコットランドの亜麻工業ではまだ事業が圧迫されている、……というのは原料が品薄で高いからである。われわれが主要な供給を受けているバルト海諸国における前年度の収穫の質が悪いことは、この地方の事業に悪影響を及ぼすであろう(さきに掲げた一八五八年十月の『報告書』でもスコットランドの亜麻工業の不況の原因として原料の不足と高価格が挙げられていた)。これに反し、多くの太物品において亜麻をしないで駆逐している黄麻は、異常に高くもないし、品薄でもない、……ダンディーでの機械の約半分は現在黄麻を紡いでいる」(一八五九年四月の『報告書』、『資本論』、Bd. II, S. 150—1, 長谷部訳、青木版二〇二ページ)。「原料の価格が高いために亜麻紡績業はいぜんとしてまったく引合わず、他のすべての工場ではフル・タイムが行われているのに、亜麻機械は休んでいる実例がいろいろある。……黄麻紡績業は……比較的満足すべき状態にある、というのは、近ごろこの原料が比較的安い価格に下落しているからである」(一八五九年十月の『報告書』、a. a. O. S. 151, 同上訳、二〇二—三ページ)。

さらにまた一八六〇年四月の『報告書』——「事業状態にかんして喜んでつぎのように報告することができる、原料の価格が高いにもかかわらず、絹をのぞくすべての繊維工業はこの半年の間はなほ好況であった、と。……若干の木綿工業地方では、労働者が広告によって探し求められ、ノーフォークその他の農村地方から寄せ集められた。……どの工業部門でも原料の大不足が一般的であるように見える。……われわれを制限しているのはこの不足だけである。木綿業では、新設工場の数、既存工場の拡張、および労働者にたいする需要が、現在ほど大きかったことはおそらくかつてなかったであろう。あらゆる方面にわたって原料が探し求められている」(a. a. O. S. 151, 同上訳、二〇三—四ページ、傍点—三宅)。この一八六〇年四月の『報告書』については『トリビュン』一八六〇年八月七日号、二十四日号

所載の論説「イギリス工場工業の状態 (The State of British Manufacturing Industry)」(執筆日付七月十日、十四日。大月選集訳、第九卷、二〇五—二二二ページ)が書かれているが、そこでマルクスはこの『報告書』では各検査官の報告が「口をそろえて、最近の半年間のきわめて活潑な工業活動を確認している。ある種の工業部門での労働の需要はすこぶる大きく、そのため労働者の不足をきたしたほどであった」とし、またそのなかで右の『資本論』で掲げているのと同じことを紹介している。

ともかくこのようにしてイギリスの経済は一八五八年半ばごろからの木綿工業の顕著な好転を先頭として、しだいに一八五七年恐慌後の沈滞から抜け出して、つぎのあらたな循環に入ってゆき、そして一八五九年秋から一八六〇年春のころの「半年間」には、一般に「きわめて活潑な」活動状況を呈するようになっていったわけである。木綿工業においては——「一八五八年には好転。一八五九年には大繁栄 (große Prosperität)。工場の増加。一八六〇年にはイギリス木綿工業の絶頂 (Zenit)」(『資本論』 Bd. I, S. 479)。「イギリス木綿工業の絶頂時代 (Zenitjahre) であつた一八五九年および一八六〇年」(a. a. O. S. 308, Fußnote 178)。「イギリス木綿工業の繁栄年度のうちでも一八六〇年は比類がない年であつた」(a. a. O. S. 279, Fußnote 110)。

マルクスは『トリビュン』一八五九年九月二十三日号所載の論説「工場工業と商業 (Manufactures and Commerce)」(執筆日付九月五日。大月選集訳、第九卷、一九八—二〇四ページ)において、連合王国の輸出入統計を掲げ、「輸出、すなわち生産」、つまり輸出の動きを見ることが生産の動きを見ることになるとして、これを分析しているが、そこでつぎのように述べている。一八四七年恐慌後、輸出は「一八五七年にふたたび最高点に達したが、この年はすなわち恐慌の年であつて、この恐慌の苦悶は一八五八年の輸出の減少のうちに示されている。ところがすでに一八五

九年には、一八四七—五七年の期間の最高点〔つまり一八五七年の額〕が、あたらしい商業循環の出発点——生産力がふたたびそこまではとうてい後退しない点——となっている」と。前の期間の最高点の一八五七年は一二二・一百万ポンド、一八五八年はこれが一一六・六百万ポンドに下がったが、一八五九年は——右のマルクスの執筆のときにはまだ一八五九年の総額は出ていなかったわけであるが——一三〇・四百万ポンドと増大し、また一八六〇年はさらに一三五・九百万ポンドとなっていた (Hughes : op. cit. p. 38. なお p. 30 参照)。なおマルクスはここで、「わずか数年の間のいくらかの動揺ののちには、商業循環の一期間における繁栄の最高点を示した生産の目盛りが、つぎの期間の出発点となる」という「法則」を打ち出しているのであるが(傍点二三宅)。これは『資本論』では、「恐慌以前の最近の繁栄期の最高限度が、つぎに生じる繁栄期の最低限度として再現して」云々(傍点二三宅)と改訂してしるされていぬ (Bd. III, S. 546. なお「一八五七年恐慌」(四)の註(2)参照)。

イングランド銀行のバンク・レートは前記のように一八五八年二月四日に三パーセント²⁵、そして同月十一日には三パーセントというここ数年になかった低さに下がったが、こうした低さは、一八五九年春一時的に引上げられたときを除いて、このあと約二年間一八六〇年のはじめまでつづいた。「レートはほとんど二年間、一八五九年春の六週間を除いて、低位をつづけた。この一八五九年春のときは証券取引所での騒ぎ (Fury) のために三パーセント²⁵ および四パーセント²⁵ に引上げられた。だがそれ以上には出なかつたのであって、これはすぐに過ぎ去り、そして一八五九年七月から一八六〇年一月までの間はレートは二パーセント²⁵ を動かかなかつた。しかし低いレートによってブームを起こさせることよりも、高いレートによってブームを押えることの方がずっとやさしい。事業活動は停滞し、……」

(Clapham ; Bank of England, vol. II, p. 239)。

(25) マルクスはこの「パニック」について『トリビュン』に論説「金融パニック (The Financial Panic)」を寄せている (一八五九年五月十二号所載、執筆日付四月二十九日。大月選集訳、第九卷、七八—八三ページ)。——「一八五八年十二月九日に二・五パーセントの水準に置かれたイングランド銀行の割引歩合が……三・五パーセントに引上げられたこと——この引上げはインド向けの銀の買付けによってひきおこされた金地金の流出につづいて行われた——は、ある程度混乱の激化を助長した。……内外債のこのような暴落をひきおこした主な原因は、オーストリア軍のサルジニア侵入や、フランス軍のピエモンテへの前進や、またフランス、ロシア、デンマークの間での攻守同盟条約の締結、などの報道であった。……パリではもちろん、金融市場のパニックとそれにつづく破産とは、ロンドン取引所の混乱をはるかにこえている」。

バンク・レートは四月二十八日に三パーセント半に、さらに五月五日に四パーセント半に引上げられ、その後六月二日に三パーセント半、同九日に三パーセントに下がり、そして七月十四日にふたたび二パーセント半に戻った。この一八五九年春の取引所パニックについては Clapham ; *ibid.* p. 241—2 参照。また Evans; *History of Commercial Crisis 1857—58*, pp. 148—170 のなかには四月二十六日から五月五日までの日々のかわしい記述がある。なお、「一八五九年の四月および五月、ヨーロッパ諸国にあらたな、はげしい取引所パニックがやってき、これはとくにオーストリアの諸証券を奈落の底につき落した。イギリスはこのパニックを急速に克服したが、ヨーロッパ大陸ではイタリア戦争の結果として……不況の深刻化がはじまり、個々の経済部門、個々の経済地域では一八五九年ないし一八六〇年にやっと底に達したほどであった」 (H. Rosenberg ; *Weltwirtschaftskrisis von 1857—1859*, S. 190)。

以上をもって本誌第十一卷第一号 (昭和三二年六月刊) 以来本号を含めて八回にわたって掲載してきた一八五七年恐慌についてのマルクス、エンゲルスの記述を見ることを終える。